

8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



右圖文庫

○御大支族

○左圖文庫

中納之

○御大支族

中納之

弔木事に又を又を美候の事

あらわ

室蟬君

信義の妻 室蟬尼君

弔木事原年君十七夏原氏君方たゞに中門の紀修ちの事よやと  
アリ少子を後承先君多ひて中門を石と云す。

夕朝事原年君十月初日は伊勢小国へて住む一月  
閏正月少子の伊勢小國へて住む一月院かれぞをさひて之  
と一常陸ながつちからくわづへうのくまきも室蟬君を  
かれぞうを

立四

口玉ワタリ  
九月九月海日シマヒ立タリ わたる年の年ヒツヨウまよかくわく  
後アフタまよ子マヨコの山角ヤマツモ 紙作エシナガ けケまマ けうとケウトひて尼ニよあら  
その後二條ニジ御ミありの御小船ミコトコルもむ

萬葉の君とソベキ様は源氏君の臣に到る様の事をうそろひ  
りてねぐらへまづきを取はう小トウゆうあつて エヌクニミヒニソメ  
キテのほぢくつまちまことういあ猪もとにけふうのヤク様とゆのよろく  
かくゆくふぢくつまちまことういあ猪もとにけふうのヤク様とゆのよろく  
まことにヤク様の尼古屋す

右舊作

小石

卷之三

○傳德文

常陸介 実譜 畠の文

易經卷之二

夕都書  
十七  
夏末  
年十月  
都以之  
居君

奥へて住ゆづる

園庭まほりか在院相塗うれしきひて又のく  
の年に常陸みぬてアリハシ

門寺 佐九郎君

九月晦日西行へ一年ようせぬ

株木の中  
佐九郎君

阿國ち 紀伊守

寺本寺 佐七郎君 中川の四方たゞの東につよきのむきてをき  
くつまつる人の中海のこころもやゑらぐとの水  
を紀入て涼しきうけよけとせゆき

園庭寺 佐九郎君 よソみまわうとひしも今ハ阿國まよそゆき

なるとく

御人報貞作 右近の監

葵寺 佐三郎君 本院の脚根より源氏君大ねみてはふすゆり

きひへ詰めよまう右近のあらん乃そうとく

佐九郎君 佐九郎君のまきの日うちの西船よてつうも  
左へ右近のまきの船へうねりかくあらむとゆきつる

ひよしきくまきてつうじまきてそへたありれば

へそてゆとくふまくうらとく

源氏君 佐九郎君 佐吉の象にそふ彼が葉のうき  
幅へ右近のさうゆけよあひてそへつけある階  
くへたうめんあうと 源氏君はあらまく限へとくとくはなテのまに  
には左近のまく引れて葵まくまくとくへとく  
かくのうきとくとくとくとくとくとく

松風寺 佐九郎君 よソみまわうとひしも今ハ阿國まよそゆき  
いのさうよてそへかくあらえでうりまかくわるなまく  
うくみてゆそへそへそへうりまきだらえ

五六

新編の秋

益人かねの妻 るのやく るの名  
宣傳 石のまこと

萬葉集  
五  
萬葉集の本とソラタ部書に源氏物語によくある方に因のうすも萬葉の  
花をとらずへばへあめうとそらかづきよしのうふよめつ名あつて  
あ橘花をふけふくの豆娘となりてよしの花をよしの花の葉も  
さうゆき見たうやうやくへよしのうとくよしのう

乙位冲狗

タ部屋より上の上  
水やならいとゆうをさひのとてこの後の

中華書局影印

文獻上

事あるあるおのやうに見る

皆タクヒトシハタクアリに御坐てよきれどもうちの夫をいたゞカハ  
モ又源氏君の御おもてなしをすくめられよるゝもつむを乃  
タクヒトシハタクアリヌタク夫のタクアリセ一ノ事そぞりニテキヨ  
ムのタクアリセ一ノ事ソシハタクアリヌアリタクアリ

五七

宰相

卷之二

宝本の文

常々よりよのまへる君もあれの少からずか筆おも  
てうのくのじよかうてゆきをゆくにとくぬせよ、むく  
あたたかと尋ねりきるそ寧わの志とてきがくむく  
くきふわくされしめひたらんあふともうくにとく  
のゆゑすかと寧わ書せりはほくをめてもて何ゆめのす  
てまきアロマくわくまくとくまく

行けまふとさへてアモア自ひりとアモアとサモアヨウムケ  
トヨリ、アモアツキシテアモアヒのそろに笑とえとくにらはるト、  
ヨモト人 物一平年頃が行けまふとさへたる事あつちを別の人とて系  
るあき人の列ああ一が行けまふと教ひてあらせん  
ニサホの君ある  
事一傳アル

山阿園集

タ部屋は唯えりんのうちも又タより上の足九日のままで  
歎の法を嘗めてさうひへ

宰相蘇子瞻先生

右近主 氏幼大浦 祝はむゑた東主  
母大御乳母 挑ほめのめのくよまふ

五八

とくめき 乙未  
三月 指揮ひてたまひへり

卷之三

とてゐる。三年のよ妹のやまの君が又お方君の四人を一組に四段  
セイ系ふつよせうとの音を歛上すりよはるよまくいざ  
まうとひうちもあつうひづひづひづ  
梅枝書口居三十九  
灯籠くぼうか  
芭翁の場せすよ奈よし椎光  
の寧よのす乃き扇厨うてあまうえ  
多肉のすけ 夕方居のひとへ

少將令跋 母惟光上月

夕飯事は又魚上をうなぐがまつては風流の御ふつふるを  
令ぬかくよひまうすがりまくらでゆきのうかづくま  
うとゆきのくへんまゆへとゆきよきよき

タ部書源氏君大御尼のあと向すふ東よりへられうつりの  
行宮御もとの三行ちむすみかと云うつるひたる御子え

○尼君

佐賀朝の父の御事

まへん將をうちの胡町の邊の邊にて一朝のうちに  
しまておもむけとす

## 傍

をかくほもうの家よりかあ尼君のよなる大とてゑて  
うそくて経せよこたるにえ

## ○太寧が弔

タヌ上の乳母乃美 タヌのまにせうめのまよ仕うふる

玉薙亭小野薙君四つ小娘の年が節よめて妻タヌ上の娘の娘  
君君うやく奥へて立ち往來するわらへんとさへひき  
病小豆うひ傳ふうてゆるうへく

## 吉後介

三歳ち

まうつまにあはれぬまうかとのアリトアキ又ミテ  
ちとづひーとーと

門裏三十五 通底石 夏服冬装を見一玉の和室内一年十月暖君

六束腰スコモアひてのち御目少しきてゆりゆく

## 次席

## 二席

まうつまには二へはくふをかくまうけでうまうきけ  
れハ主のわんのゆりかくとそまう肥後守のまえ壁小  
そくわく御者君のすだとくせーとせーとせー

## 揚名介の妻 母ハタヌ上のえいと

タヌ上タヌの宿のうつあらひをめかす

六十

母 母夕暮までにこの晩、家へ向うへそふくのまのうひまめくらうとくまのよハ  
母 ほりて右近ハとくもあうされへまくとくとくとくの母あくよもさくさくあ

云部君  
りてき

まづまつまつりのまゝに  
今ハ多氣の君とひよそあひけん、おまづきうえ  
お隣また多氣とひよそ

○捕麻弓

卷之四

孫良清

源少納言  
數負仇  
近江守  
中年

源氏君十八 小りかくよハ捕テちの子れど人づきと  
着ゆふ事十八

源が納まつてゐる  
あれがうきく内  
部の入るのしきめ  
のは、たぢしきをも  
にまつてゐる  
と見てあつてかういふ  
あれと連するものには

清標考  
十九  
よ  
歎負佐とくの  
門君  
三十  
よ  
近いちた中井とくの

五言

源氏  
一月の末にようやくおひるは近寄  
りてお申あらわすまうけらしきめでまひてまつて  
まくくあわててあるまあれ六娘をあゆむ

## ○ 挿奈大納言

君家ふ事うよみゆき かく原作

女

禁上の母上  
母の山僧教の妹

君家が事源氏君 よりふを挿奈大納言よりあくて不一の御  
めれひえあうへきこく まめのくらんあうへく 小山僧教  
妹小僧うちへむじすとうちふまくへとてつきまし  
やくふたまて又居よあくれひーく、只母の尼尼ひく  
らつひきひー、母小きおねえはまひひしてくづひきまし  
うとくのの方やんとあくあくしてやまくねすむ  
みてほくれあとひしてうさすくす

○ 父

詠もか

山僧教

君家事源氏君 三月源氏君つゝの病のかねさんとてからかおハ  
くづくちう小山僧教の坊よくまくわくくわくる  
次テ事門君 よくまか納々ハ僧教よくめりのとくふとくまのとく  
君家事口君 小りふを僧教のゆづりにくわくくまくことくとく  
いきくづれま

尼君

挿奈大納言の母方の母上 禁上の祖母

君はかまふりふりまく君はくとくとく、早ちまくとくとくとく  
まくの持教ふくくめて後世をうむとて傳うめひよく  
と傳うにようう京よもよてねへね山僧教たのすへよくとて

六  
二

主の行方を尋ねて  
年九月廿日之付

○ 父

少納言

母上の手紙

善けまへ原氏君十八よりよき納きのめのもとそく人ひよ多るハこの  
壁上うつろいあつてまく門一まくのゆき原氏君ニ奈院又  
はかとむくきよ財か納まし年うぬ

卷之三

山の上の方

第三回  
二日のよみゆきひ物見うなぎ一束にりよ  
か御まへむとあーてもううやむらさんとおもひや  
ふくらむよひてもすゞのあとよをよひもこれまひ  
てよきさむよくこのとひひとうひよ

卷之三

萬葉集卷之三

大浦令媛

母のまゝの乳母と氣味の悪い御内閣の事

未描花（源氏君） ようかたまつの乳母とて の源氏君 大御の尼（源氏君）  
 つきにあはりたまつむきとめ大橘の令嬢とて 国よもぎ姫さん  
 ところのちお大橘あるとむきとめくらういひたまごめこばれり  
 くふとけくらうとておしめ つひかくまくまくおおせ、おおせ  
 のめとてわづらかへ父君の件を里までまつむ花の口許（口許）  
 りかづかは娘君の出来と源氏君こうまうへあら

## ○父

流す事

## 和泉翁句

義家上喜（源氏君） にうるを お文活

## 中納言の君

臘月夜の角宿（源氏君） の女房

柳葉（源氏君） よつまつの音葉（源氏君） たらほそとつ（臘月夜） つわひふ  
 中納言君（源氏君） がいとてを源氏君（源氏君） れまろく  
 次（源氏君） まくまく

若葉（源氏君） さの中納言の君の件（源氏君） を源氏君（源氏君） と  
 つゆのす彼人のやまくまくのこのことのことのことを  
 てまくまくおとふくまくひまくまく

## ○左寧太郎

源氏君（源氏君） 秋浦氏君（源氏君） 治テ小かひ一けつ時住（源氏君） とて  
 のりかづかへゆせんとせんえだまふも（源氏君） まことせんたまふも

## 流す事

卷之三

かく内父の便りをまけたる事なかつて子の氣味ぢやうあるき  
はひよのまへつかへりまゐり人あはいづるかな  
ノミシタヌシム人へのうきハアハヒて志  
けむとまへ

○官内省の掌相

酒標書

内宮中宮の乳母  
母五院の主君

速標源氏居 二月四日まで昭君はかづらひと  
とかくふやくまよひ古院小ちひい室のひを  
めあ内乃室おみてあくかのすあをゆあも  
うきてうまかせふくらうとうかきまくよてようこぢう  
ときこくつげくとあたうりやうてこのつらはま  
むひまくらへてまくきるみのまじかるとや  
ての浦よわきくふおづけのまくわくとせと  
よあよへよへ

六五

わ風まゝ口若  
辛一 秋晚君の西行にて家よりある  
萬葉まゝ口年多岐山姫君と二条宮もむ(きひ)附の向まゝ  
めのとみねとてゆてやうあらんそくらひも(ひようやう)のと  
のとて山車にのらま(脚注)あまくわぬとつをと  
あまくわぬれ考へ

○按卷大綱云

とくのまよひを  
ぢえあ

物語月がおほくへゆきあはれ彼まく小楠を家大納言たる者と之のちに妻と  
葵よりりそなへてはく酒のほか大納言ハ小楠君もやと只うれと若菜下まく小物  
方大無と行れハ別人ありテノクハ一中の  
系家よけ人タマタナシ小走

あそこの君

とくめき 源氏  
二十二 土月の夜よつて捕らへた大網をたまひうるのみ

○常陰分

浮舟君のまゝ文 薩東也 少年薩の名句

よ、らむ今、近づいた中無事あんまりうるさきち  
めうそりしてあつてまくくじとある年あれ、娘とお  
くまうきまく

は舟君のま文 薩摩ち 東薩の船司

寄生をもつとも一め薩摩をみて後より東薩のかにゆくよ  
ひまく 萨摩 まちあゆのわる

あむまふりふくもいづやまくさんよひのまくらうとをひめ  
すらせてあくまくおじくあくらえ

卷之三

東風より  
書志  
廿六日　因の使徒として白多久の事にあつたとは承る

の母よれそむくへあまつて御まゐるあらわのまうと  
あらへあらぬの四使よとまきまうと

源か納言妻 田ちづけ

東屋妻に東のたゞよ住つくとあるゆゑと多きもへる

後段妻 母ちづけ

東屋妻ふくの源か納言後段ちづけとぞうたる記

玉出いしんよ

萬事無事かづくめのものとみる二三くじら

翁人右邊の監 母後のわきは母君 けいへ

多か事萬事 せはよつて彼ひうちのよとへかくわうけり

ハ萬人小翁おおね 法はきのをくかふへかくわう  
絆きうきまへきうかにまくむかあるとハちくつひあ  
さんとあやつたりなま

小君 母後のわき

多か事に童とくのひはく

萬事萬事萬事 小小翁とくの小翁ふかはまほお君のやせた

萬君の正使で

たぬかるゆ方 母後のわき

東屋妻萬君 秋ゆとハは母君をかねふまくへくへてちの  
まくまくすて引たつてけじまくかぬひまくとへつかひあ  
のたゞほづくとく

はおまにふ生アタマノシタトアタマノシタハアタマノシタ

サカニシタニツムリのよしハセキスリハタラムトヨシタニハタラムト  
アタマノシタニツムリのよしハセキスリハタラムトヨシタニハタラムト

○大游

た近アタマみね 売陰アタマのむこ

東屋裏アタマにあらのすあつアタマ門アタマ一アタマ小賣陰アタマのむこアタマ

年アタマニアタマミ

○父

アタマ

女アタマ事アタマ小アタマの常陰アタマの娘アタマとアタマ近アタマみアタマ小アタマ妹アタマ

口アタマ事アタマにアタマよアタマ人アタマ跡アタマハ妹アタマのアタマ方アタマは母君アタマよアタマりアタマてアタマる

口アタマ事アタマにアタマよアタマ人アタマ跡アタマハ妹アタマのアタマ方アタマは母君アタマよアタマりアタマてアタマる

妹アタマ

○父

アタマ

ち仲アタマ夫アタマ

若菜アタマよアタマにアタマもアタマ夫アタマ

柏木君アタマの乳アタマ母アタマ アタマの夫アタマの尼アタマ母アタマ アタマの孫アタマの娘アタマ

若菜アタマよアタマにアタマもアタマ夫アタマ

橋路アタマ事アタマ小アタマを持アタマ大アタマ納アタマのアタマをアタマてアタマうアタマハアタマ母アタマ子アタマ

あん竹

奈良院の女もあら乳母

中絶えのうひと

着葉上りからサニシ らめのとのどか  
年毎からみの風乃  
ちを喜ぶ あづまのとくにそよぐ  
風うきそよぐ とくにそよぐ又中納  
のめひととくにそよぐ

小傳

菴草本上等（優良）よりよこの小竹皮（シナキ）といふの  
の植木盆（シナキ）ひもケまで之

着葉が少く早めの小枝は  
いぐらがまだまの葉で  
うのよのとのもさあくら  
そのよのとれりこのんりを  
のほのとれいき

楊眼夢ゆりよニ象乃あさくわひ 小竹枝ハモウアケアリ  
竹うにけろとゆのうにせけ 又薰君の詞より竹枝といふ  
ハやのうふかやうひつむつむりあり 神山や像山  
ひもとやまとうをまきとあんきくま

○父

清江集

一象の肺息筋

余舊院の文文 為ひふるのゆ母

若葉やまくせニまの山事銀づるふよひはま  
の二まとあん柏木えまりてうらやらうの支夜抜かがりほ  
柏木まくせぬれあくまゆり  
タカタキ 五十 八月高めよううてかおのねふ小ゆきの山事ふゆ

こゝでうさゆ

大和守  
浪士也

タ方某に一象の山是本山莽の所よりとてあまきよとて坐と  
いの大和守とておけらそじうの山小町つしゆくらるる

みのの君  
彦空あの方 小町の君

柳本某は小一象の山はタ方君のとひおにそへ時當へひ  
れにあらよへる

タ方某は小又の山は山是本山莽の所よりとてあまきよとて  
坐よかねの君とておけらそじうの山小町つしゆくらるる  
大和守の姓あれハ  
もあれあへぬうちにおまきようおやへたてまひれひ  
のりうへとてつるておとせむひとせむひとせむひとせむ  
ミヌ小町の君とて

○父

浪士也

大和の君

子孫の中の君のまわ

子蕨某は山莽の山中居ニ象山は山はれひ一時車小  
のうへて行かれはうまでおとせむひとせむひとせむ  
まつは山莽の  
おやへとて

右也

おやへとて

七

あはまほは舟若の二条御のゐのへとひてお、  
白玉かわらまひ一筋からふ有<sup>アリ</sup>て大歎、ひそめ  
さくぬみて、かうして、うじよりあらえ

卷之三

浮舟に浮かぶを追うるの常陸までへまくらせや」とか  
とくにアゲハがまくらされむるをみておひ  
まくひて伊豆にせふ今のうちにとすとゆをまくら  
てそばにまくらふよわてつひよ今のとひまくらて  
アラモトをもすせんせんまくらまくらまくらまく

妹

独りあひつまへけうやまらさんじよくらうされ  
とうちやまらたらきのとつてうつうんとてよのうち  
とよあひもかぬきてせのたゞきそとてちのうち  
よしわいきくらうはうまのくはあうてまく今に急  
あきやうへてゆくまくあくま

卷之三

は舟居のや房

七

物あ追とりかへてゆるとは年君とのせ戻のう は月がよそなむ  
あらくまふあさひてテくとれ猪れくのうとへせんのうちも  
たふほして後の人のがくをまう。は舟きのうふは年君ニ魚食ふ思  
ひておこりふへ白ふのうしてワカクシ一をくすふをしおう  
トキアセモ多くの間より今く中君のせ戻とまわ猪に年君  
のまふほよひゆふきひておこしよくふまによ  
次からまくでめめと人を口へやう壺のふりかうふとそよとれ  
う部やめあやけふそまひしきれくは年君すつてナメかとねうたう

はお通えくとくのうゆと抜ぬけをうちは舟底のや房をぞぬくとあふ  
かくふのまよやく一四一くニ条船そのとくとくあらわすぬらうとくヌキの危  
君のは舟君の母とく  
かくふのゆかくふ

たまはいとめでてまくらをあきとまくらのゆうとくへあめとがわ  
さんさんとあきとたまふらひとめのゆうけりへとよよしも  
是は自立のゆくをぐるゆめでまくら浦もしよもとづかへ右近のゆく先の尾はま  
宿のゆくのゆくで中元はま方へハリぬ人あは右近へもくとまきま  
あるへとえもへかとヨー左近あははまのゆくをいってあるへと  
おれへ左近へ一人ある事、論をされとみ移君あへんにへ延びて能  
ゆのゆく書そーと後ううそれはうたふへとあるへ  
又世故まくらがち近き者ふるゆくゆめ  
らのまのゆくのゆ方に中元をあひてのゆく  
くろひうぬやくに入るハトたまへとくもくさきよとせこえさせけで  
そそきまひゆきそれよあちまひてうのゆくへけりへとよをゆのゆく  
できりへあくま

山ノ上に水を貯めてゐる中島の水場やその下の山洞等  
右邊二ヶ所ありますよ／＼溝あ

○大徳大勝仲信 茅君の弟子

字承志。又  
楊陵志。又

大内紀伝定の妻女

はあまふつゝの内記ちうちのあやたみのちまふるきにそ  
又ひたゞれ胡弓ハ松仲信うめくわがよそあん竹くわく

父

卷之三

「出雲持る時方 九月三日

はあまくちあをひよ多ひおばへりうゑてつよくもにひく  
もがくのひきいあわの二三へは因記きてはあめのとて御人  
よううかうえくろけくとんじゆくへとうきうをくうま  
てえまの御え出雲のうへのうへ時方の明月とく又金をまえ  
あまくもえ

「因幡守

口事ふアキシタニは舟をとくて川をひよ多ひておにせー  
时の都アキシタニを御ふりふ時方うどもの因幡ちあうらうす  
まうにそくあくひづたるああううう

父

後もか

は舟をとく

名のアキシタ

は舟をとく

トド

名ハアキシ

船がまにほ舟をとくひづた後方うどうの系にゆくまくお  
大とくうねうとくのひづたとくまのひづたとくまのひづた  
あうじるおほ船をとくひづたからくきくとくとくとくとくとく  
だちげとくひとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

阿闍梨

阿闍梨にとく

名ハアキシ

○父

卷之三

右馬記

精勤書はりよじきをひめか取てあの筆とよめ おのえ  
すのゆの方へとくとくの右馬次とくとくとくとくとく  
ひげたるをひととくふくらひたらとく

まゆらひのちよの後の方

清江先生集

〇  
父

卷之四

横川の修教

行  
佐  
母ゆきの大尼君  
あらわすやまうらまく

まわるまに母の毛髪の尼ふくを取あつて、ゆかぬ少佐て  
ゆうきに母の毛髪いづれがひく限りのまことに、そぞれハ横  
よやうとくの傍か山へあらのわいふくへとて、  
ひりぬとむらさてあらす宿院よりもとまくをす  
てはおもひだるふくれてふじきとくとくでやうて  
はひて少壯ふくふくとくも傍駿年六十四雪中も  
秋一ふのあひゆるやうによつて、かおよまくりとくには  
お君のまとせん中まよゆくとく

妹尼君

ちきう夢の少方 京の四方

おもろまきゆうのふは承るるのうと傍説の徳うへ詞うふを  
妹を憐つのかのうよけ一尾あんうをか一せこのうも

つまひとほ毎年足ひようひはりて毎年九月又初節  
又宿たるより一の年かすむくま

常陸のゆきのゆ方

浮舟まづりよ常陸のゆ方ハアツレキモヒヤトスハ尼君  
妹シテアリノヘニ是ハ尼君の母の紀伊ちう小国小山にまつて  
ソロウニは尼君の母とよハアリ

父

近より

紀伊も

浮舟まづりよ大尼君のゆきの紀の母アケラヒのやうで  
アケラヒ三十そりよりてアツラギトケホシテアラム  
ナリキニ浮舟君アリモのヨリモトミニ君もアリスルケ  
アリスルカと小サの尼君にてアリスル

○清つのう

きわる事ハシメ

仲のゆ方

母少子の傳説味

きわる事ハシメ

○父

近より

ゆね

少室尼君のひ

まわるまに尼君の音のむことあるど一又の年廿七八  
小サ小宋アリて浮舟君小けまつせー人

「禅師の若

まわるまにひよるの かどくとみやべへ居 横川の 信政のゆゑに  
まのしまひなまき

○父

おもかく

阿周梨 少年の信政の弟子

まわるまにひよぶねの尼ハヤシとみやべりのまわるにひく  
あり小所くうえ

かねの尼 少年の尼君の弟子

まわるまにひく

○系圖あた人

相姫

鞍負令ぬ

右大辨

相姫

相姫更衣うせあひて後因の西便とて文政の  
母とのもとへにひづれへ

源氏君のゆうじうもたちても幕へ小ぢりを  
まくへり名ゆえ股の糸よむと

萬能布の糸よ小ね風車小枝の立枝の度小美くへ  
花ち余情よ漫あらうそくう邊あられハ別人あらへ

萬能布の糸よハ相姫内侍とくあめの絹よ  
スノク後のくわうにすくう石かうへ。おふ

まくへぬ内侍すけハ先帝の内侍のくわうやあつる  
のまのりと委せへ

室長えよふゆけいの令ぬう内侍のアケのまくへ  
ぞくりん候まく

源氏君傳え彼の事に大驚びて人には  
まづらえ

### 帰本毛

左馬郎  
後或前風  
右より

中納言の君  
中納言の君と云ひあはれに思ひ  
志うとの心豊ひのやうにゆくからすらむつて  
きりぬきゆく事も勿事えども

中納言の君と云ひあはれにゆく事も勿事えども

ハモヒケと久の君こううみたるをみてあれてたゞの御また  
まきうある。ゆく一き代ふへ一きとハえともきく波くぬよと  
次をきふいふ御内この中勢中ねるとゆのぐくれあき  
坐てかへる。くえまき御ことあくまづれ行ふかつて  
うきくわいのちうりてこのせよスうるやうもりんと行け  
ケんとおとんくは坐上てかくまくととのまひてくまくま  
まくねうさまじてまく寝標事にまかね中勢をばくふ  
やくくにつけふさナとアキナたぬてくあくても善葉  
上まよもうの門下事に中勢の君と

中納の君  
空蟬毛  
中納の君の女房毛とある中納の君とあらひな  
まく又別くの中納の君といふとあらひなれひま

### 空蟬毛

七

民の心

天をかねのものとて、いんのあゆみあんきうべ  
うへるぬわのよのたけうちふとつえ

あ  
ゆ

源氏君と三人の女とくとくめ一人  
名ハスミル

文部考

夕暮の鳥乃弓アタヌの弓ノ乳母の支を寧  
か御のむこアリめいがうる人のあよあん侍うける  
ととこハウサ小まづりてやあんヨリトヨのみてえ  
六糸弓息弓のサ弓中ねの弓もみうーー弓  
けぬのあゆま  
うすく、うそてちづきといわくくらしも」やう

揚名錄

たれハ氣息ひくすみてえもくさく又胡旁のそれ  
弓もまづぬとつよすよそへよし

右近の君

夕朝上のや房夕のものめのこのひもえ  
有邊の君らそまうものえすと源氏君何  
の院ふ夕之上とりてかソモヘ四代小弟夕上をまひ  
あゆの尼君のつづく船一舟のをア四車小さくて  
のすくいもとようニ索院へもとづいてまくしま  
玉葛まくふりよ有邊ハ行の人びあくねとあくもと  
えきひてらうなきゆのふかやーたれいかく人のひぶつ  
まうあれたらすまの山あひの神またのうへ室の四  
にまかくくせくまくへ縁ひー柱よりとあくにまよ  
らぬまえの内よまくまわ有邊さうのふるとけう松葉

三  
何  
ち

指先の株算 父ハ源とすか

小山のひーと

源氏君わらわのからにカリセー人アラム小山  
小山人アラムまとつておゆ、さり行ひ人アラム  
家上のわらハナの子といめきうふつてを  
みうちうべあらつてのとての上アラムハドモ  
トヨウミアラムみ葉交えにもる

小山傍教の事

源氏君アラムそは紫上の祖母の尼アラムキ  
キアラムとおてり一人

王令ぬ

彦雲や院の女房源氏君の婦セー人アラムハ  
王令ぬとさわづきすふき排アラムモハ  
て茶舟の水をとよめりの門を女院アラムがさうを  
あらすけ危アラムかの次アラムを小室のひうつて東アラム西アラム

よ侍アラムセラフアラムの彦雲事アラム傍教の御小あふアラムと王

令ぬうほのくはりのアーキアラムたれ行アラムシ

毎の令ぬ

彦雲女房の女房アラムめのとすのアーニ月移  
小山の細流アラムハニアラムモ吉紙アラムハ毎の令ぬと

○詫アラムか

彦雲女房の女房アラムの御ひらアラム井上アラムの  
おぞい門アラムをたゞせきとせつる人アラムは小室  
あらぐアラムてうこせきアラム行アラムく門アラムをせき  
よもじくアラムおとせきアラムかくおとせきアラムたひづるは  
おもむくアラム下アラムひとアラムて御アラムモモリアラムねまきろ  
すまくアラムくのアラムにうつアラムセーとひとアラムてうね

未搞花妻

七九

翁弟も

源氏君のぬめのとたまとのれ母ひまた猶令ぬ  
のすく文

あつひ花の女房ぬめのとむつまくともうせん  
みはくよみーそぞううつまくへかゆ小  
りくすくこちまきまきに人部の物たづく小さくひ  
つきて花はくわづくまく

まくの翁

常陰のまくつゝへ

右小用一まくの翁の翁のむきやう  
まことやまくの

中勢

早木妻ふ

寧相二人

左馬侍を馬曾

たたね

中納言の君

あくやのくくたいめぐへたりまく

中勢

右門一

源内侍の子ナ

年五十七八九十九十の年もあつて、もは源内  
君小まひ又改中納言へひげくえきすれ

八

さすがにうまいとおもひてゐる  
朝食は、小源内行の下けもの  
せきの四つともあともうすこいと  
まへ

原内侍のすげえ事

金の令嬢うら  
君はおまへにさる  
いわき  
山上の女房  
君はおのまへふる

花溪志

卷之三

赤院

そのじゆかはあらうとしてくわをば

宰相の系

タモリ君のひらめと  
まつわのまくわの、さるをじ  
ことととづくとゆがむうたまのひらめとあ  
くよるにすまに着きのひらめと寧おのゑとま  
くまのひらめとくまとくまとくまとくまとくま  
のまくわと寧おのゑとまくわ

行  
文

中  
の  
志

上手かみかむらの御事ごじにすまの君きみとを候まわうさくち  
えりひあかあかをいそぎひつまきひすまやううんうん  
いあさててあしもくもく、さううとまけまま

源内みなすす

あ葉はせ  
まよめ

中納なかな玄げん居ゐ

墓上はかの女房めふ書し

金かなぬ

争ある事ことにあ

柳やなぎ毫ひ

赤家あかの女め行ゆき箇ご

かくとくかくとくへ何なんぞとてとててあんと女めああてて

えきえきうう

内うちののこ

中游ちゆうゆう

横川よこかわの僧そう姑ご

槿秋院ときしゅいんの女房めふ

尼おとこありありへばううに臘月らづき花君はなきみ内うちののこ

にめりめりう

中家ちや丈じや

萬葉まん花はう里りのの洋よう一いをを中川なかかわののわ

王金おうぬ

争ある事ことにあ

金かなぬ

又また金かなのの君きみににあ

花放里はなはうり

女め

通とお君きみ花はう里りのの洋よう一いをを中川なかかわののわ

ににくひくひああひひややああひひもも

まひそりをうながすをやられぬ時もと娘えへてま

まひそりへ

### 須磨毫

寧おの君  
葵アメ

王命ミコトノミコト  
葵アメ

中移ミタケ  
源氏スガラヒノミツル  
景本キムラニシマ

中移ミタケ  
上元カミハラ  
葵アメ

### 丹石毫

○  
あわさ

まよそりあ風アモソリアフウのほそくひよ活アモロコテの庵アモロコー

らすき姿アモロコ子コノは侵アモロコ小末コノー人ヒト

○

あわさ

### 丹石上の乳母

○  
あわさ

めのと母アメノトマタとひうみつこ下アモロコとひうみつこ下アモロコとひうみつこ下アモロコ

### 塗標毫

因アモロコ

秋アモロコ中アモロコの女房アモロコへたう因アモロコ也アモロコとひうみつこ下アモロコとひうみつこ下アモロコとひうみつこ下アモロコ

わうくわうくわうくわうくわうくわうく

中移ミタケ  
葵アメ

中移ミタケ  
景本キムラニシマ

### 芭生毫

左寧太郎

かね

佐渡

あらわらの女房  
あらわらのふみ

まつも花の母方のまほせた御よろこてりうと  
まつも花の女房例假うとハのかねとしひけり  
ありくあんづぬ声うてけうつとおまゆすれき

園籠毛

総合毛

平肉角の子ケ

竹使の肉角

総合の時極毛の女房秋ねずまの四方ち方  
にてむくふくひ

右小内

かねの金ぬ

大部の肉角の子ケ

右小内一はの総合の時の小内ひ尾籠引ひ人  
そしめの総合の時江徹敷の女房波佐吉の女房  
右方よてむくひ

中ねの金ぬ

右小内

立湯の金ぬ

左近中ね

茶菴院うち初の総合の時極毛の女房う  
四絃よセミよ後よ小糸こりり人

女行當

林幸小

松風毫

弁のまゝのひき人ひきじん 石上の母志の内役又は勢の主の駕くわり  
大井河のまゝのひき人ひきじん ひつりへ

源氏志極のひきの日山車のまゝにのせ  
ましー人

ひゆみ

右小口

義人の弁

口付に冷泉院れいぜんいん ひき小弟こだい一人

右大弁

口付よりすこと下さかくあとも  
一人ひとりあひたる人のすこと

肩雲毛

肩上のぬ房ぬぶはよの外ほかともりまくら人のよふ  
四ようとほくらほくら小こまうすまうすひきうへ

傍そば旅

は入いりてのままのの内うち母志ぼしの世ようつも  
アモロウの師しまでまくひけひけの傍そば旅りょ冷泉れいせん  
ゆゆふくらひてほくらのままからから一ひと巻まきたる今いま  
そそセナせなもくうき

胡ご鳥ち

槿つき海かいのぬ房ぬぶ源氏志ぼしのあリセーセー付つけセセ  
ままづづくくーーととくくまままま

深ふか内うちのすけすけ 石いし雲くも

宣せん

ととのまま

タガ君あきらめ附身ひ一日在大ね波仕合と  
口へりけひへ

文章博士

口へ時作文の歌ひをへ

た中矣

口へ時作文の講師でへ

た大矣

タガ君察試うけさせりんとて内保氏

或那大痴

右小門へ

大凶記

タガ君字官の口傳

主井名の乳母

大浦のりのと内を食被仕の唯君のタガ君小ぢひ

タガ君のすとくとてありそへめのち位下へせむ  
つやまへへ差あままにソムサ君のたりふりめのと  
お位下へせとつやまへ日めとめのわく小ぢへ  
されはまくタガ君まへえも

小侍従

主井名の乳母 小侍従や侍従のまへとまへ  
まへゆめとまへえ

宣名

種井名の乳房  
羽ぬまゆる

寧相若 タガ君のりのと  
まへゆめにまへ

太史臣

刺のりむとて肥後あまくひろくてう  
こよづけてハあるえひつゝとひひがくへ

ひみのひみうきくわくまく君ふけりへせと年二年

玉音毛

そりうき

おまめの乳母

名はえの年とくわづかひたひあはと  
ソふがよこへんみかの事

あらえにか原とくわづかひがのまく  
ひー太とみあさるとひくとて

さうてさをありと

三索  
ゆうる君の女房 三索うにめとほうする

女としれい又そへんあらぬやくこよタ

人されとくへつまつあらくのうれきと  
ゆうるうまできへんのこなうとあらく

大和の女房  
おとねはおのきあらの方も

おとねはおのきあらの方も

名はえの右近うの腰とよえの

右近

スモ

初音毫

けねの君

お上の女房

お蝶毛

秋好中丈の女房

お小のうて南の地ふとまかへへ名ハ  
スルにふとまか

童八人

名はえのうて南の地ふとまかへへ名ハ  
うとまかへへ

卷之二

お爲志力や房 柏木君の小爲志 小口

右近  
今ハ玉萬子のサ房  
夕景臺にアリ

近 夕影書きに及ぶ

卷之三

おとこの本

は内ねよ近の君の仕事もくら  
みのる者とてまほつゝへうら

あらわのよとてまわづくへうかくのゆゑ

ワルハシモウタケシ

卷之三

志の川之

西の門の女房たゞ

大津の志

おあくびをうなづけ

中納言方君

萬  
大  
卷

右近文

卷之三

源氏物語の歌人（おとし）の傳です。一巻から八  
九と並んである古文書のうちをとめてあります。

右近

お萬葉のゆう方  
ク新まゝうとて

ゆうらき

章おの君

松ぬ中ふのか房ゆうの門に夕方君の弟う  
きしーをうそひいへん

内侍

左小門

右馬助

夕方君の弟人ゆうの門に夕方君ゆう  
かくまひへん

行章毫

あらへのた鶴尉

ゆのりまの日経年をふき一枝うる  
内侍ふあうへん

最持毫

章おの君

お萬葉の女房

みのふゆや

右小門一鶴君たるの際で一人を承接をもとす

お朱極毫

中絃

鶴君のとみゆか房用ゆくかられ  
のとやかとちかつきつこひてやうたう  
又お方丈のゆかとてうとよもひてゆうとてけくわ  
不ろの水いとゆかとくの君とくはせーへとふハ

カのあかね

本の居  
右内へひらうてこうひよのとよ  
人の方父のあかねてこうひよの象にりの居ハ  
あかねの入てそきにえ

中納の娘  
道の象の象の女房引い中納す寧お  
の娘かわくそくそくひける

寧相の娘

右内へ

糸のあかね  
糸の女房

右近  
上内へ  
タガキヨシ

梅枝

大郎

源氏の女房

肉竹  
糸の娘君はゆきの糸にゆきへうけの  
やあかねやうてこあくにゆきへう  
詮もかくし糸の娘君の肉竹のうを

た太郎

ちるあうとく

右内

タガキヨシ

梅流布の糸の小梅枝右内へうきておまつ枝の付女房さんと  
せーにの娘君あくへきにうておひくめー人とそあ  
枝に梅枝をかたむくうて次の間小糸のひよくゆきへう  
とまくせうい葉室殿とすとくう流布のやい得う葉室殿のよ

子良族の中

小さくやう

タガキヨシ

中勢家

梅枝

九  
十

右近の文

タニモスヨウマムルモノ後胡の又の通便ヤ

大膽のめのく  
毛井なるものめのく  
とくらまへゆく

そし井なるものあり

新古今

おまかせめりと  
さまである

卷之三

このをも  
行署梨人

# 東菴院のひきこもるふう

仲賓植龜

右  
大

牛羅院のせうふのあめの日射ぬ中まづや  
やケの奥もくらまへ出使かまつ  
かまくら——わがのちもんやまひて群——  
きひきとみゆ納まふ汝も云止聲のやうのよう

東山道宿場の因縁の手本

卷之三

13

中野　ゆうのせん

仲乃  
口上

卷之三

九一

清文作  
済民の系にひ四月廿日  
ひのりあくまきひすく  
あくまきひすく  
あくまきひすく  
あくまきひすく  
あくまきひすく

源中  
あきらのそよ附かよひへ

梅家の居

ゆきのゆき  
ゆきのゆき

柏木毫

草の木の山の

橫笛集

卷之三

尼君十日人

やのまのせうるるいそくに かく ぬく  
まうりぬきはくすくくくくくく  
あくわうくわくわくわくわくわく  
ことにてくわくわくわくわくわく

印光大師

夕霧堂

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

九二

もとおのづかくもひすてらるまくはりて  
まくにゆきこちひだりとあめくら  
まくにゆきこちひだりとあめくら  
まくにゆきこちひだりとあめくら

右史

蒙古文

九

ちまのめと  
を井るのみや  
とくまくらむ

清法書

幻毫

卷之三

まの上屋のゆづひをひりのをさ  
あれうち極ふの墨茶はふと、みひふ人仕表  
すくき煙をもらひ、さりとふかへ傳教をあらむ  
くじくせあきたふれいまくくつてすくき、とせし皮傳  
教のひそく小あらひてらくよのすくきあらぬま

おまほのひじきの葉  
おせのまくらき

中納言の君 ほむゑのひん  
景永まくわらる

中納言の君 と小日  
葵まくわら

九三

白文毫

紅梅毫

竹川毫

寧あの方

かうの君の女房 葵君 小さくてえへんに白い  
まきうやまくのふうよもけー人又婦君と中  
君と花竹のひーとくの寧あの方をど  
右うて東方あう間とうてうへ散めう花あれハとよ  
おちくーとくしゆ

女房

名はくにあ萬葉の女房 まち人のすな小川  
うやまくもあくへ柳のむくふくーうきし人

大浦君

口一中君の女房 花竹のひのどうれの賭方  
まきうやまくのふうよもけー人又婦君と中  
君と花竹のひーとくの寧あの方をど  
とひととくかくくー人

中君のこくへ日ーとくに桜花みわひらまく  
ちくくーとくすくくー人

あねき

中君のあゆや

口一婦君の女房 まち人のすな小川  
名はくにあ萬葉の今本序 桜花みわひらまくの女房

竹川のまくのすなはとひりつやとよすなとよ  
て葵君とあくまくー人

女房

橋姫毫 うらの十帖

宇治の阿闍梨

宇治の公家の中席後律師小糸一翁うらゆ  
ひちうだらうらうけいすとくらき冷泉流も  
まくへく竹へひて西津をへきるあらうとあらゆ  
まに今ハ律師小糸一翁うらき椎やま鷦角を寄生す  
まくへく

殿の人

門一翁の名はさくらの善君宇治小糸一翁  
どう殿君の出舉のをすをましんぬねむ  
ゆ衣ぬまうけひーにうのさーつめ袖のとむてよつ  
ひーうーうめふ巖まく小中の君取へ山猪の柔に少く  
あづりにうのひけうちの殿の人ふとひまかふうれはま  
善君の名はさくらの殿君の方へおでり

人

権本毛

一人

白家の公文おもく宇治へりへるはまくま  
あらすまくまきをえりありふゆ

宇治の阿闍梨

宇治ハまの公席  
萬福寺小糸

鷦角毛

トワラハ

名はさくらの宇治の中席へ白家の公文おて  
まくへく

中席主

白家の公文おもく宇治へりへるはまくま  
あらすまくまきをえりありふゆ

記やとつふあらまくまきをえりふゆ

又あるまくまきをえりふゆ

宇治の阿闍梨

萬福寺小糸

早蕨丸

宇治のゆゑのや房

冬はスルに申名ニアサギアリテラウヌヘ車  
にのむて引トシタモトコトハシム

レ人

宇治の波の人高麗主

寄生毛

浦又波<sup>アシカ</sup>申勢<sup>アシカ</sup>ノ<sup>アシカ</sup>波<sup>アシカ</sup>上<sup>アシカ</sup>人

ミツヒキトシ

衣<sup>アシカ</sup>衣<sup>アシカ</sup>

あふ<sup>アシカ</sup>候<sup>アシカ</sup>

ミツヒキトシ

衣<sup>アシカ</sup>衣<sup>アシカ</sup>

按<sup>アシカ</sup>君<sup>アシカ</sup>

幕<sup>アシカ</sup>君<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

申君<sup>アシカ</sup>のや房

テ<sup>アシカ</sup>君<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>幕<sup>アシカ</sup>君<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

象<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

おぬの君

章

は申君<sup>アシカ</sup>のゆゑの波<sup>アシカ</sup>のあふ<sup>アシカ</sup>  
時<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>アシカ<sup>アシカ</sup>

申君<sup>アシカ</sup>絶<sup>アシカ</sup>

宇治のゆゑの波<sup>アシカ</sup>高麗主

常言のくこの歌乃めのよ

あくまでもちの娘とくにた近いものの方  
うう

素性ちのひこ  
父雅<sub>ル</sub>か

卷之三

卷之三

卷之二

ほんゆまのねやまかわさくら白雲  
之後小馬ノ人

75

（あさひのうき）

致  
人

のほらまくらうかあくぬ牛ひづらせつらはく  
ほれゑふるえのむよもひまよひもく  
やうのたゞのくわくらうかうとひく

音  
是

一人駆除するには手もうけまい 後向ふ(手)を  
引ひれと叫ぶのゆゑ(手)たらよ

かみの志

中西の文庫

仲文先生  
續角書記

字叔達

九七

大內記乃定

弘法が御とおもひまつたの御司をむすぶ浦仲信  
むとをひきりてゆまにあへてくまつ  
ふまづく人向ふまひく ちほのまにふかくまつて  
ほ身をふきまひく 素内で 人まのゆきよまの  
内にいざらのか膚とふくらげたらうるえ

因幡ちう  
宍道ちう

おまけにせんを廻りのじりもしおはいに  
ひすらかみひてからくらうかの富士山

阿彌陀とあくとゆひてかづくの

蓋てその四傳承者なる者をもよろび  
ぞうれいの四傳承者なる者をもよろび

白の文をすほへおじい人をひそめ  
うのか浦大島をひくがえりて時ときのあしかども

男

1

肉食人

右自太史

右文

中忍の事をば身忍のひ文うへ／＼も  
ち身まことにづくぢう事と曰へ事ある／＼

卷之三

安

小寧志

ほゆゑのほひく名ハアスルトリセサム白矣乃  
ラ復のミムシイヘ  
今よのサ一のまのサテタキムのふゆひへりシ  
シモカハシトツアキムシヘキカホキニアキ

大却

大納言君

本草院の女このまの女房某をうすおひ  
とのせめひてまゝかとのまひへ  
今上の女一乃より女房中多の女房某は母  
君のそと徳り少へ

糸のあゆ

日一女一のまろ女房がまひたまへ  
右手へ花のハラモトをまわる

中ね君

ふくらへ

女 女

日一のやうの女房某の女一もと  
アツシテの時まくへ  
茎毛のまろふそひよつてといはくまき  
牛牛もとへむあひたる人

右を大更 ほせきに  
とめ。

内舍人 ホヨー

宇治の阿室御茶 今ハ律師ふあつう  
接觸多はる

侍後 ほ毎君の女房  
接觸多はる

身方毫

宿めり

僧二人

侍後

本草院の山林を落の院より下木の落めり  
横川の侍級のすみは毎君のつゝの山とくき  
てあきへとえあへん  
は毎君の仕ひ人侍級のまくとて毎君のまく  
よもくうかうどんこくとくにひ  
コケたまうま

二十九

右を大更

支津納々

少佐の尼君の御車の中のとひー不支津納  
の口向こうまたたぬきいすふやあねどか  
とあまうへうくとくの河海小豆津納々ハ尊惠君の息  
さく佐ももき方で御車のよー(8月おとほせうた)  
うあるあうーしろくねハ河海の設絶ひくー

たまつ

ま

主殿

門一五の弓

口一五の仕ひ人あめゆづばくそらつよこ  
てとづくしき

寧翁の名

サニヌの女房  
藝能者にあ

支津納々

